

橋弁慶　長唄　全詞章　能「橋弁慶」による松羽目物

〔弁慶・名リ〕　是は西塔の傍に住む、武蔵坊弁慶にて候、我が宿願の仔細あるにより、此の程北野へ、丑の時詣仕りて候、又今夜より十禪寺へ、参らばよと存じ候、如何に誰かある

〔從者〕　御前に候

〔弁慶〕　今夜より十禪寺へ参らうずるぞ、供仕り候へ

〔從者〕　今夜は御止まりあれかしと存じ候

〔弁慶〕　何とて左様には申すぞ

〔從者〕　昨日夜更けて五条の端を通り候へば、十二三なる稚き者、小太刀をもつて切つてまはり候は、さながら蝶鳥の如くにて候

〔弁慶〕　左様の者あらば、何とて討たざりけるぞ

〔從者〕　討たんとすれば逐ひ払ひ、手元を敵へ寄せず候

〔弁慶〕　飯令手元へよせずとも、大勢にては討つべきに、追取り込むれば

〔從者〕　不思議に外れ

〔弁慶〕　間近くよれば

〔從者〕　目にも

見えず

〔弁慶〕　神変不思議奇特なる、都広しといふとも、それ程の者あらし、実に奇特なる事かな

十禪寺詣をば、思ひ止まらうずるにて候

〔從者〕　然るべく候

〔弁慶〕　いいや弁慶ほどの者が、聞逃しては叶ふまじ、今宵更けなば橋に出でて、化生の者を平げんと

夕程なく暮方の、夕程なく暮方の雲の景色もひきかへて、風すままじく更くる夜を、遅しとこそは待ち居たれ、待ち居たれ

〔牛若〕　扱も牛若は母の仰せの重けれど、明けなば寺へ登るべし、今宵ばかりの名残ぞと、月の光に眺むれば、面白の景色かな

そぞろ浮立つ我が心、五条の橋の橋板を、とどろとどろと踏み鳴らし、通る人をぞ待ち居たる

已に夜を待つ時も来て、山塔の鐘もすぎ間の月影に

着たる鎧は黒革の、緋におどし大鎧、草摺長に着なしつつ、元より好む大薙刀

真中取りて打ちかつぎ

ゆらりゆらりと出でたる粧、如何なる天魔鬼神なりとも、面を向くべきやうあらじと、我身ながらも物頼もしく、手に立つ者のあれかしと、五条の橋板ふみならし、心凄げに

歩みしが

薄衣かづき立ち給ふを

弁慶見付けて

言葉をかけんと思へども

彼は女の姿なり

我は出家の事なれば、思ひ患ひ過ぎ行けば

牛若彼をなぶりて見んと、行違ひさまに薙刀の、柄をはつしと蹴あぐれば

スワ徒者よ物見せんと、薙刀やがて取直し、切つてかかれば

牛若は少しも騒がず

太刀抜き放ち

つめつ

ひらいつ

戦ひしが

たたみ重ねて打つ太刀に

さしもの弁慶合はせかね、橋桁を二三間、しさつて肝をぞ消したりける

ものものしやと薙刀を、柄長く取り延べ走り寄り

てうと打てば

飛び違ふ

裾を払へば

おどり上り

宙をはらへば

頭を地につけ

千々に戦ふ

大薙刀うち落されて力なく、組まんとなれば

切り払ふ

詮方なくて弁慶は奇体なる小人かなと、あきれ果てぞ立ちたりける

〔弁慶〕　不思議や御身は如何なれば、斯程健気にましますぞ

〔牛若〕　我は源の牛若なり、さて汝は

〔弁慶〕　西塔の武蔵坊弁慶なりと

名乗り合ひ

〔弁慶〕　降参申さん御免なれ

今より三世の主従ぞと

契約かく仕り

薄衣かつがせ奉り、弁慶は薙刀を打ちかつぎ、九条の御殿へ参りける